

北京騷擾 その五

中島八十一

すんなり眠りに就くは余の常のことなり。枕違へど、窗外に騷亂起くれど、變はらぬならひなり。

浅からぬ眠り打ち破るほどに激しく部屋の戸を叩く者あり。眠りたらぬ心地より類推するに、いまだ宵の中ならずや。ただ音に驚き反射的かつ機械的にベッドより飛び起きたり。怪しむこともせず、即座に錠を外せばそこに立つは學會の先達にて、余と同じくいまだ若き學者なりき。彼「君無事なりや」と訊きたれば、余も「何事もあらじ」とぞ答へる。續けて、かたじけなくさうらふと謝意を示したり。その割には叩く音の凄まじさはいかがせるものかと思ふは後日のことにて、戸を閉ぢてほどなく余はまた眠りに就く。それより一時間半後、また戸を激しく叩く者あり。開くれば件の人なり。「君安穩なりや。我は君のこと心配にて、心配にて」。「かたじけなくさうらふ。我明日までここに眠ることに決めた。他の人も同様なりやと述べ戸閉ぢたり。なほ一時間半後そのまた一時間半後と同じこと繰り返されたり。愚鈍なる余にも事の怪しさは傳はれり。確かに昨日テレックス通じずと知るや、困りたり困りたりとひとりごちつつ廊下を往來するさまは多くの人の目にせるところなり。かくて夜は明けぬ。ともかくにも朝餉なり。行けば昨日同じ約四人ばかりが集へり。食事ははや終へたるもの余加はりて心強く覚えしか、さらに居續けたり。小姐すなはち給仕を呼びたればただちに來ること變はりなくも、メニューのうち珈琲は用意能はずと言ふ。件のパニック居士も居て「シャオジェ」とはいかなる漢字を當つるかと思ふ。小姐と答へたれば、こはゆゆし、中國語話すやと感心せり。旅行案内書に載れるばかりのことなり。

食事の話は騷動以降の街の物語なり。余はもはら拜聽するばかりなり。米國のカメラマン二人が當局に拘束せられたるところ米國大使館より海兵隊出動し、ただちに身柄取り返し來たりといふ。カメラを構ふれば相手よりは銃構ふべく見ゆればゆめゆめカメラを向くべからずといふ。昨日の死者數の傳聞に續き、誰より仕入れたる話ならむかとあやしく思ふ。中國人に知り合ひやある、在北京の日本人に知り合ひやある。

この日學會關聯の行事は何も持たれず、晝餉も夕餉もホテル内にて取れり。ホテル内の掛かりはすべて弗建てに支拂ふことに豫め周知あり。さながら部屋に付けおけば最後にクレジットカードにて決済することにて済ませり。外出のみ慎まれ、終日自室にぶらぶらせりとも時間をつぶすこともかなはねば、按摩を受付に申し込みたるところ快諾の返事ありき。この事變下に可能なりやと思へばなにがしかをかしくあるも、數分後に電話あり、けふは派遣するを得ずといふことなりき。按摩は中華系に限ること持論なれば口惜しきことなりき。歐米の淋巴を四肢の末梢より中央に戻すことに專念する施術と異なり、臆の神經受容體を壓迫することにて筋緊張をほぐすには壓迫點の探索のための感性和押す力十分必要なり。この點に於て中華系は合格なり。

晝寢繰り返すことにて前夜の不足となりし眠り補ひ、今宵は同じことの起きぬことを願ふばかりなりき。ボーツとし無爲徒勞の一日を過したる譯にて、戦争と言ふはこれの幾年も續くことを意味すやと思ひき。戦争文學といふは戦闘場面のみならずかかる情景の描寫をもいふことにあらずや。

(令和五年七月三十日受附)